

国立民族学博物館の収蔵品 ③⑤

イギリスのコーヒー文化



写真1 昨年開催された当館開館40周年記念新着資料展示『標交紀（しめぎ・ゆきとし）の珈琲（コーヒー）の世界』で展示されたイギリスのコーヒー挽き（左端）



写真3 ウォルバーハンプトン駅周辺の風景



写真2 製造地と社名の刻印

イギリスの代表的な飲み物と言えば、紅茶を思い浮かべる人が多いだろう。しかし、イギリスのコーヒー文化は他のヨーロッパ諸国より古く、十七世紀まで遡ることができる。オクスフォードのハイストリート（目抜き通り）には、今日も「イギリス初のカフェ」と称する喫茶店が二軒、向かい合わせに立っている。共に十七世紀半ばにオープンしたカフェである。数年前までは「キリスト教圏初」をうたっていた。

二〇一六年に当館に寄贈された三〇〇点以上のコーヒー関連器具

「標交紀コレクション」には十八〜十九世紀のイギリスの製品が多数含まれていた。例えば、高さが一二九cmもある、業務用コーヒー挽きである（写真1）。上からざらざらとコーヒー豆を入れ、木製のハンドルを回してゴリゴリと挽く仕組みである。ミル自体は鑄鉄製なので、とても重厚で耐久性が高いつくりである。挽いたコーヒー豆を入れる木箱を空けてみたら、標が試しに使ってみた時の残りと思われる乾いたコーヒー豆がポロリと出てきた。一世紀以上前の製品であっても十分に使えるようだ。

新着資料展示の準備のために標コレクションを熟覧した。二十世紀以前のコーヒー器具でブランド名や製造会社名が明記された製品は皆無で、モノの来歴を調べるのが困難であったが、このコーヒー挽きにはB.M.PursehouseとWolverhamptonとの刻印があった（写真2）。ウォルバーハンプトンは十八世紀より鉄工業で栄えたイギリス中部の町で、B.M.Pursehouseは中心街にある挽き具の専門店であった。一八八一年の統計によると、この街にはコーヒー挽き具を製造していた工房が九〇もあったという。まさに近現代イギリスのコーヒー文化を支えた町である。

ロンドンからイギリス北部に向かう電車に乗る度にウォルバーハンプトン駅に停車する。車窓から見える風景にかつての面影はなく、非常に寂れている。私はイギリスに長く暮らしたが、Made in Englandと記された工業製品を見かけることはあまりなかったことから、ウォルバーハンプトンでかつてはこれほど立派なコーヒー挽き具が製造されていたことにとっても感動した。全盛期のイギリス帝国を垣間見た気がする。

（相島葉月）